竹の先

まのかふ家 并二

哥と詞を名ときわ

[V. 44]

PL788
.4
.G4
1654
vol. 44
Copy 1
Asian
Japan
Cage

2004551302

蕉十四五七より廿七のるすを
これはげんじのれぞうにもそなれぬへりし後の
ひげ黒 むかゝを云へ
大殿つくりにありけり。ほろごくちのおちとまり
口ノほろき女之
のこれりがとまずがくりし並くりは。むらさ紀の
紫ハ源ノ粒子後ニ小方之黒も
おなじるすなぐにさりハひげ黒ノ小方ニなりを云へ
ゆりにもまぎめれど。かれ女どものいひけりも。
ほろごくちに
源氏のれすゑぐに。ひがことにもれまうじまて
冷蕉 むはゆるす人ノたしなこしらぎかるすなれバ之
ゆりはまれよりもとしれうぎ川まり。ぼけくり
女どもノ云へ
けり人のひがことにやなどあやしうけり。いづれ
ひげ黒
かはまことなるん。内侍のかゝのれもしらに。加賀の
むかゝ
れ子ハおとこ三人。女二人なんおりしけりを。さ海
ざ海にうしづきくてんこと紙笑しをきて。とし
月のゆりも心詠なるがり給し程に。お人なくうを
ひげ黒ノ

給ましかば夏のやうにていつしかといそぎ
おぼしたれ（むつ子達）こやづかへもなさるりぬ人の心はかり
のこゝろりけざなりかれば さばかりいさほひいか先
たくおもをしおとゞ（ひげ黒）のれ名称うちくのれこゝろ
抱 ゆやうじ給さゝろぐ そのこゝのおとゝろへも
なけれど大かるのまさ夜引へこゝろやうに夏の（ひげ黒ノ）
うちためやかなりゆく（むつ）かんの志たれちかさゆ
かりそそしこそいよかまひろごりこまへど中こ
やんごとなきれなりしひのもとよりもたるし
かんざりしに（ひげ黒）お夏のなさけすうしをられむかく
たさすぎぬへりけれかどまて心をかれ給ことも

ありけるゆゑりにや。これにもえなつしうきこえ
ゝよひ給ハず。六条院にはすべて御昔にかはらず。
かずまへきこえしなて。失なひなん後のことだ出をき
なへるれそうぶんのかゝどもにも。中宮のれつぶる
くまへなりなへれば。右の大夫などは中にそれ
ころありてさるべきありくをとづれ男に給。男
君ハ遊ハれ元服などして。をれくおとなび給ハし
かば。夜おいまで後心もとなく衣なることもあれど。
をれづゝなりいでなめべかあり。姫君たちをいかる
もてなしなんとおぼしこゞろ。うちにも此宮
づへのかいふきよしを。おとゞのそうし垂給

それがおとなびなひぬんとしと年月ををし
えらせのひて。おほせごとこゝずあれど。中宮の
いよくなるびなくのこゝなりまさり給ひけるひに
とされて。これ人むとくにもあれし給めなり。すゑに
まいりて。ぢろうにめをそばめられなんも。まづら
もしく。まゝ人にをとり。殺なるぬさ海にてこん
もゝ。こゝろげくしなるべき氏。そしらもこゝ。次泉院
よりいとわんどろに。そしの給ひをて。うんの君乃
昔ほいなくてゐしのひしつゝきをさへどりへ
しうしこ。冷ノ冷しのていまはまいてさゞすぎ。すさ
まじこさるさ海にも。拝こまふともこゝろやすさ

おやはなずくへて。ゆづりぬへといとまめやかに
男のひかれバいかゞ（ぶん）もあるべきことなるんこゝげ
うしのいとくちおしきすくきうそ。心のかゝり心
づきなしとおぼされましうばさづしうゝじけ
なき後ぶよれすゑなやかんじなをされまし
などさぞめるのふ（地ノ娘）ちいとようおもすう男
ありてこゝろかけ給ひとおほかり。右の大（タ）とおく
藤人のかねとかいひしハ三条（雲内）どおくれ服（そう）にて。
兄君たちよりもひきこういとじうゝしづき給。人
がしもいとおしかりし（藤人かね）君いとねんじにゆふ。
いづるにつけてもまてもなれ給ぬれなりしひ

なれば。これ（タノ子ノ君）ぞちのむつびまいりぬひなどすれば。
けど（ヱノ）とくもてなし給ひず。女房なもけぢかうなれ
よりつゝ。さふことをかくしふなもこゝよりありて。
よりひかあらりさしぬこゝうしうましさ給。うな
さき物の心ぐらしきまゝ。うん（ヱ）のとれも思しこり。母（雲の）
きこのこのれゝこもさばくなり給。いとうろび（タノ子ノ茲人ノ官あさき）
こゝ（とあく）程な侍れど。おぼしゆるすこもやとなん。
おとゞも（タ）笑し給けり。姫（ヱノ嫡女）君なぞ（ヱム）さしまこゝのさ母
まもおぼしをきて給ひず。中の君をなん。いますこし
よれ笑しうろぐしうしぬ程なるずこひなしバ。
さもやとおぼしけり。ゆるし（茲人ム）給ひずは。ぬしてこも

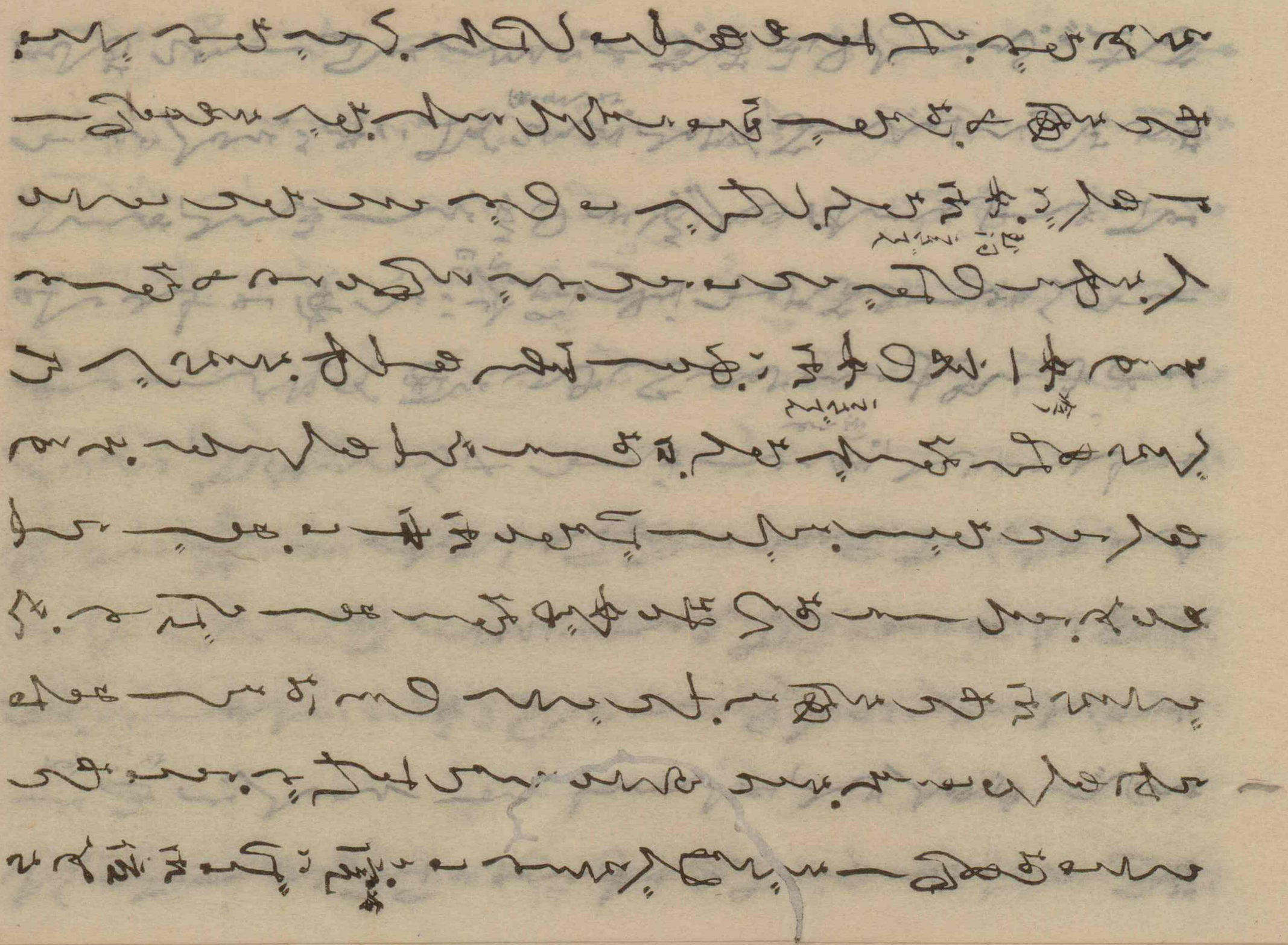
とりのべくむくつけきまでせんりきよちきこと
とはおぼさるど女がたのころゆゑし語りぬことれ
まぎれありハ世のをとこきくもあまつけきつぎなれ
むきこしつぐ人をもおなしこあやまちひきいげ
なくどの語よくぶされてなんつづくしかりけ
六条院の御すゑ朱雀院のこや太政殿にむまれ
めへりし君次衆院に御子のやうにおぼしいで
四位の侍従それ此十四又ばかりにていときびつに
かさなるべきほどよりハこころをきておとなく
もくめやすく人にまきりたるおひさきしるくこそ
語をかんの君もむこまてもこまほしくおぼしたり

此段ハ枝三条のみやといひしハちらさ箱あれバさるべき
おりくのあそびなどにハむすびのひもときてこしのふ
みだりあり心よくなき女のおりすりなどあれバわろき男の
心づかひをもちゐるべしちぎりひさしき世中よりさる
これよりさきハこれをうちさしぬ翁人のかねてしりく
心あざむけるそちまめいひつくろふこれ日位出
行平のいまうと人ぞなりけるが六条院のか
けさのちかうはひちかきさしたりけるやあらん
世中をそれてつゝしみてかしこきことあるへきなり
わかき人ハ心とゞめてあそびのとゞもげ
うそめやまかれなどのかひてさびしうねぞ給

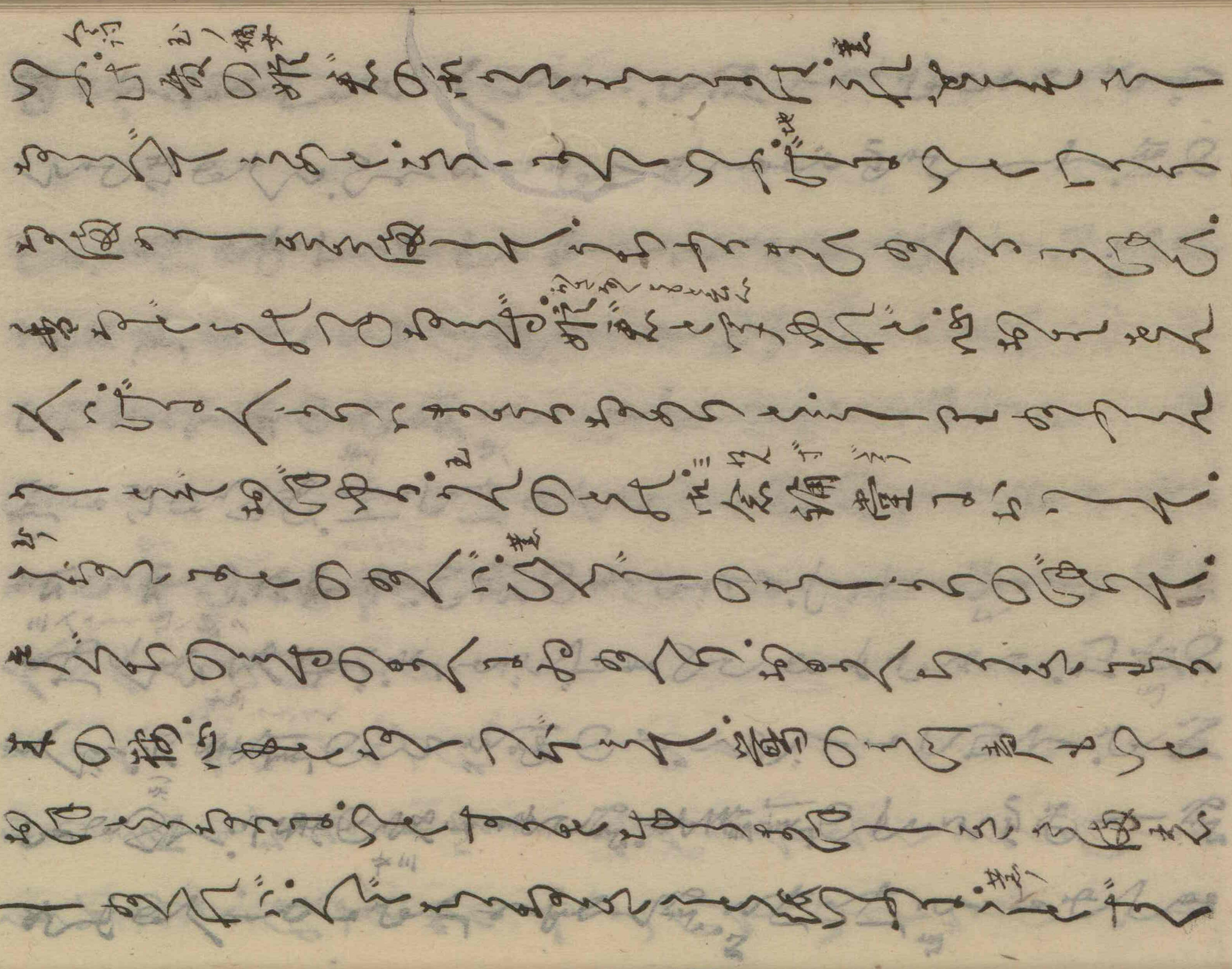
なぐす。院の御心ばへとせひいで罪て。なぐさむよ
なりいふじうのこおもほゆるを。それ御かたこよも。
これをはこまとん。右のおとゞも。ことくしき
御ほどまて。何いでなくこゑめんもうたきをなど
のまて。たしかしのつくまさひ罪しめへれば。かれ
恵もさるべき事まさひてまいりあふよ。それつね恵
すきぐしさもこしず。いとうたげまりたる
とぞ。寝りしこのつきへども。口おしくさうぐ
しきことまさひて。いひなやましけり。む月恵
ついたちごろ。かんの右の御もしかしの大納言。こ
あんと語すると
うさごうたひしよ。教中納言。右大殿の太良。まき

ぞしられひとつだしなど（ゑ）まりぬへり。右のおとゞ（タ）
も。此子ぞ六人ながらひきつれて（ゑ）おりしたり。此たち
よりもじめておかぬことなくこゆる人の此ある。さ海
おぼしなり。（タノ）きゝぐちもさ海ぐいとをしげりて
さしのほどよりはつかき位もすぎつゝなるごと。低
ちふんとこしたるべし。よとしまま。蔵人の君も。
しづれたるさ海ことなれど。うちしありてもふ
ことありがなり。（タ）おとゞは（ゑノ）此手へだてゝ。背り
ゐらぎ此物語をしぬふ。（タ詞）それことなくてしばし
しばもえうけ給はらず。さしのうぞそふまくは。（今上）内な
まうつよりかのありきなどうぬくしく此まて

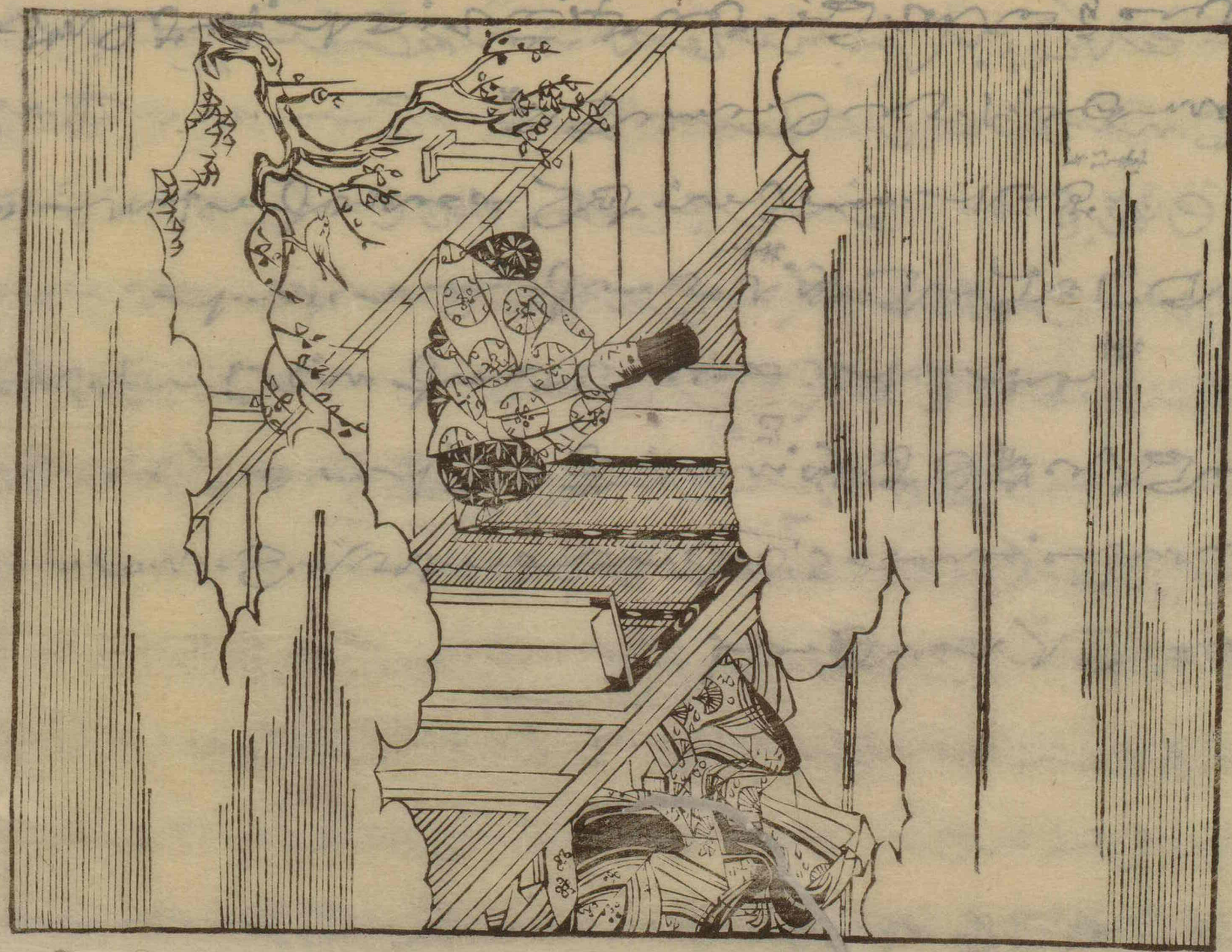
ゆれば、いまし人の御ゆゑも、きこしまほしきおほ
ありおほくすぐし給せるん。夕ノ子歴 おきを此こぜハ、さらべきこと
なほめしつゝもせのへ。必その心ざし御らんぜられ
ことゝ、いましめ給ひて、冥ゝ給。玉詞 今ハかく世にあらず
にもあらぬやうにありもありさ海と。ぞうしうぞ
まふるまちん。係ゆ 色にし御ことも、いとゞ忘れがたく。
せふのへられけるとゝ給けつゝあでり。冷 院よりの
ゝ海にすること。ほれめしこそ給。ちかぐ志う
うしろこちきさ人のまじらひハ、中こゝぐるしきをと。
なるぐせのへちん見ぐらふとゝまんぞ。夕詞 今上 内ゝ
おほをしきことれあるやうにけ給りしを。いづ



ちふのへよりはなんと宮ゝ給。これかれ（正）ゝまあつま
里のひて。三条の（女三）家に集り給。朱雀院のかゝる心地し給
人ぞ。六条（源）院のゝぞ海のもかこぐにつけてなり紙
れ入る（女三）家をば。えよぞまいりのふちあり。此（正）殿の
（三人ちうゝ正ノ脇ヘ）左を中将。右中弁。侍従の君などもやがて（タ）おとゞの此
（と）侍に出のひぬ。引つれのへるいきほひことあり。ゆふ
つけて。宮位の（慧）侍従（恐）来りのへり。そこゝおとなしき
所公遊もあまるゝさ海ぐり。いづれかはまろびこり
つゝ。これめやすりつゝ中にこちをくれて此（慧）君乃
こち出のへるいとこゝにあくめとまる心ちして。例の
抽めですりつゝ人こちは。なほこゝありなど



ちる心まくさほどなるを（くゝノ）はるゞりて（ゑ）寧ねの君と
きゝ申る。上らうのよそうけ給
（寧ね君）ありてこぞいとゞ匂ひもまさるやとすこし多
めけむめれもけ茶（芸ノ）くちもやしとさうて
（芸）よそよてハもぞなりとやさぶしたんちゝ
まほへる梅の和茶（羽）さらバ袖ふれてこのへなどいひ
すさふる。まことハいろよりもとくちぐのさもうこ
りしけべくさ夜よふ

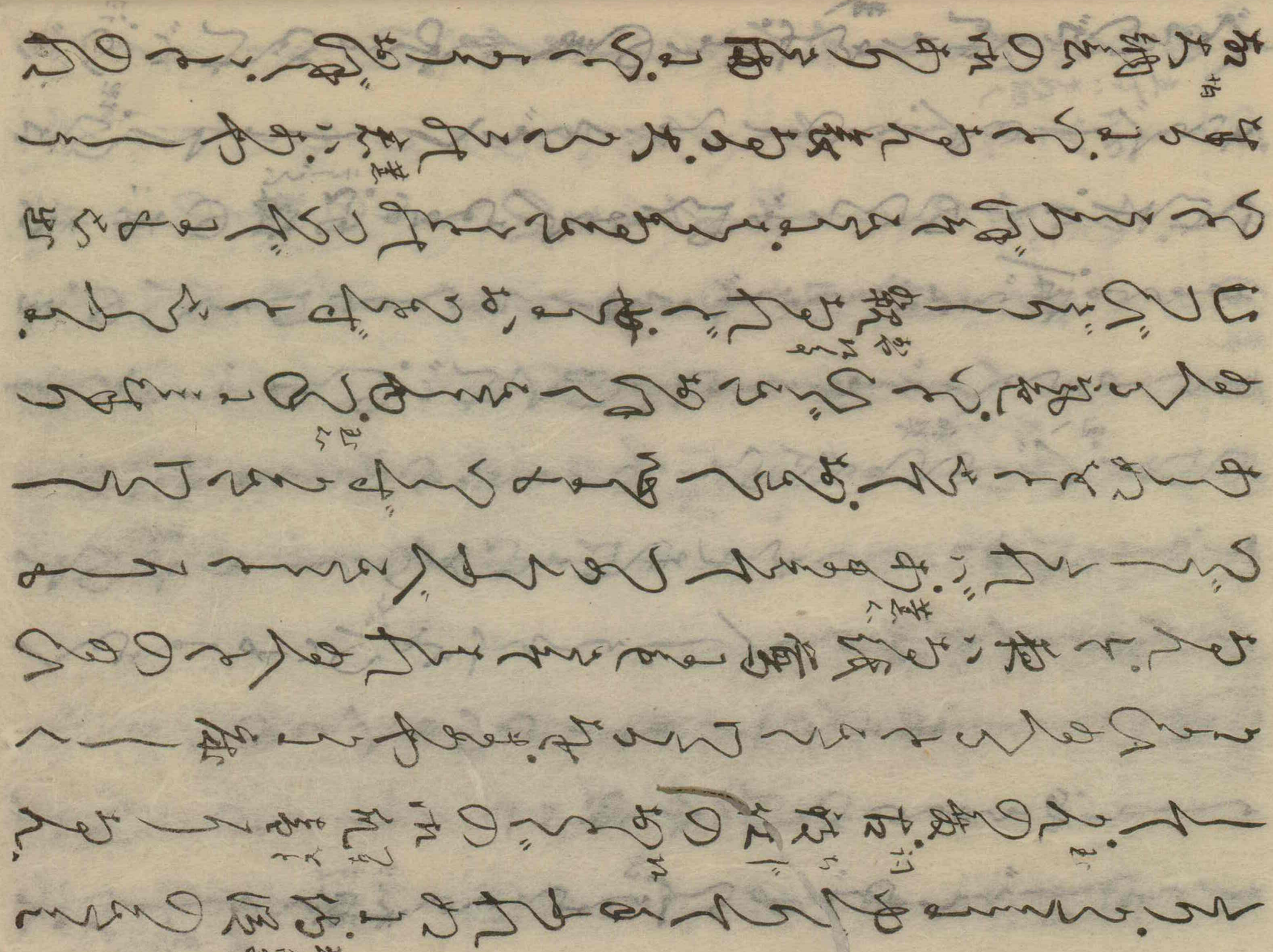


ひんの恵おくのくらゐぬぎり出ぬてえ(詞)そのぞぞち
やまづしげなるまめべとさへぐくこそおもなけれ
とせびてのぬふなりまめべ(恵ん)とこそつけられれいとゝろ
しろゑかれとせひねぬへりおほじれ(五ノ字)伝説ぞ(ぞ)なども
まぐきねばところぐもありそでおりしあひたり
をんかうれおしさゝろぬへりしてくぐもれ
さうづきぢうさしいでぬへりおとぐ(五詞夕)はねびまゝり
ぬふまゝに(ぬ)説(源)にいとようこそおぼしまりぬへれ
これ恵(恵)はぬへる所もこゝ語ものなけいひのいと
せめやかにおまめいくらもてなしぞ(源)かれ此且ゝ
ぎりせひやしらゝかうぎ夜ようぞおりしかんかし

あはぢ。ゐひ出まして。うちしぼられのち。ふる名殘さ人
とかうりうちうしぐしきせ。へぐんめでくけかへ家。
給湯のあまき。まめ人への名殘られしとあひそれぞ。
女よ目の代。梅の葉ざうちあるよ。句ひすくあげよさら
あるされしずまき秘あるしハさんりしと学して。薮紡のの
ゆかりよおりしより中門へのまふ程よおもずちくし
すぐうちあう人をてまきりつくれちんとあひけうを。
ひのさとぐめられバびつのよふちワづらふかねあり
ちりさん薮のとしおもてまびハきうの聲のとしゑ
すうま心をまどりして、そを家ちあめり。くうしけや。
人のゆかさぬらしあひもしめんハ門をし。うし家

べきつぎかれとしふことの声もやゝぬれば、いざ
しらべしぬへ、まろもいとことどくしとて、ひき
つれて、よしのつくどれくまへなる。紅梅の末
もとる。樹がえなうそぶきてこちよりけるひの。花
よりもしらくざとうちよほへれば、いまどなし
あけて、へごあづまぶ低いとよくかきあつきこう。女の琴に
てつまれ奇いうしもあはきぬをいくしとせひて
今ひとへり。ありかへしうこふをびいもまちく
い夜めしう。おありてもてあいぬへるあたりぞ
うしと心とまりぬれば今夜はすこしうちとけて。
そうなしごとなぞもいふうちより和琴さしいで

うりかゝるまゆゝりてもふれぬ。仰(ぎゝ)の(ゝ)こゝ
して。かん(ぎ)の夜。古(詞)枝(ちじ)紅(は)のおとゞの此(つま)風(とと)をりなん。
うらひぬへるとゝてつゝうを。まめやうに床しく
なん。と夜ハ為紙鶯まもさそきれぬへとのおひ
いぐしこれバ。おまそ(蓋ん)てつめくゝべきことをりも
あらぬをとせて。おきく心まもいくずりきつゝし
ぬへる気色。いとひぐきおほくきこゝ也。つ(むん)ほこまゆり
むつびぎりし靴(おやはしす)なれど。せまおりをずとゝゝる。
いとうろぼそきまゝ。もうまきことれついでまもゝ出
なるまいとなん衣なる。大かゝこれ(蓋)ハおやしう
お大(拍)納言の此ありさ面まいとようおぼしことのね



ちかごろ・ふるきそれとこそ覚しつれとてちかひのかなしみ
めいのふるしの詞もうちや・おかねもしろいと面
白うて哉さらさうふさまし心つきて・おもしろ
ふる人もまじら○ばなまれづうること・まではや
まれてあそび給ま・あそびの御僧も・こおとくずまは
まのへるよや・うやうのこといとくれてさらさら給
のこすもしれが・こゝろづきさぞうてきんやとゝ・もろづし
めされて・紙河をおもふ声さへてでもて・まではつ
されど・おもしろうふすれうちまりうちさし
いづ・急いのすゝそいだのかつことも川まれぞ・
ひがことすらわざとこそ守給れ・いうまそあい給

ぞく。ざるまうけひんず。こうちうさきあうとうほそ
あすれ。ひとがあつしうきしとうあざらりあへうう
まくまりうげのふ。おうまぞもぞあどさうどうさて。
待沼いあうどのえまうちうげていぬ。びさざめて
うけられど。とづむまやまて衆文まそうとてまげま
そうがおいぐされ。深待沼のさとのう沼のあさうう
あれいざられ人へられまうそ心よをあつゝあ我身いいとゞも
んじつくもひよもうて。ゆらさあすぞうしもう
人へられ葛は心をとう河すゝん猿ぞまざふ甚の衆
のやさう。うちあげさそくて。いうちのひとれう人し
都うしや哀も志ゝん梅の然くてぞうかまうう志もきぶ

あしたは四位の侍従の詞より、あるじ、此侍従のもとに、
よべ（芸ノ文付）いとこゝろがけしかりし紙、へぐいかにこゝのひけん
と、こゝ（玉ヨ）ゆへとおぼしうかゞちにかきて、たしに
行河（芸）のちしうちいでし一ふしにふりさこゝろ
のそこはしりきや、どかきたり、しん（玉ノ）我にもて来りて
これかれこゝのふ（玉付）手などもいとおしうもあるかれ、
いかなる人今よりかくとこのひたん、おさなくて
院（深）にもをくれなり、たゞ（女三）家のしどけなうおふしたて
ゆへれど、私人にはまきらべきましそいあめれとて、
かん（玉）の君をこれ君ぐちのまちぐあしきことを、たゞ
しめ給へ（あるじの侍従）人りことげにいとけりくよべ（女付）もこゝろ

むまやとなん。へぐとどめきこゆめりし
あまどの侍従
こけがはよう紙かきじといそぎしをいう
なりかしとさひとりまし。げに此かしをもちじめりて。
此志の所ぎりしにおりしてそしきばこよろ。かねの
をしきりさもさるく。これ人心よせこそ。侍従の
志も。つきゆちにちきゆりまて。明くれむけび
まほしうさひそりやよひにぬて。さく侍あれば
ちりかひくもり。おほかたれ盤なるころのどやかな
おりすさころに。まぎらくこしぢりなる
つきもあるまじかめり。それころ十八九の頃どにや
おりしけん。れかたちもそろくべも。さりぐにまぞ

なりしき姫（嫡女）ぞいとあぎやかなけさかう。いまゝ見ゝ
ちさき海しぬひて。げまこと人まてこゝちゝがよげ
なるぞこしぬふ。様のほそなが山がきなどのおりは
おひこゝ多おひのなつしき程にかきなるとこゝ
すそまでおいぎやうのこぼれ落（おち）こゝやうりこゝ也。
此まてなしなどもらうくぢうこゝろもげりしき
けさへそひぬへり。今ひと（中宮）所ハうす紅梅（こうばい）りはぐし
いろまて。御のいとれやうにこゝ也。いと
そびやかなまめしうすきこゝろさ海してどもり
うる心ありきけハまさりぬへれどまほひやうなる
けさへハこゝなりしとぞひとぬへり。碁（ご）うち給とて。

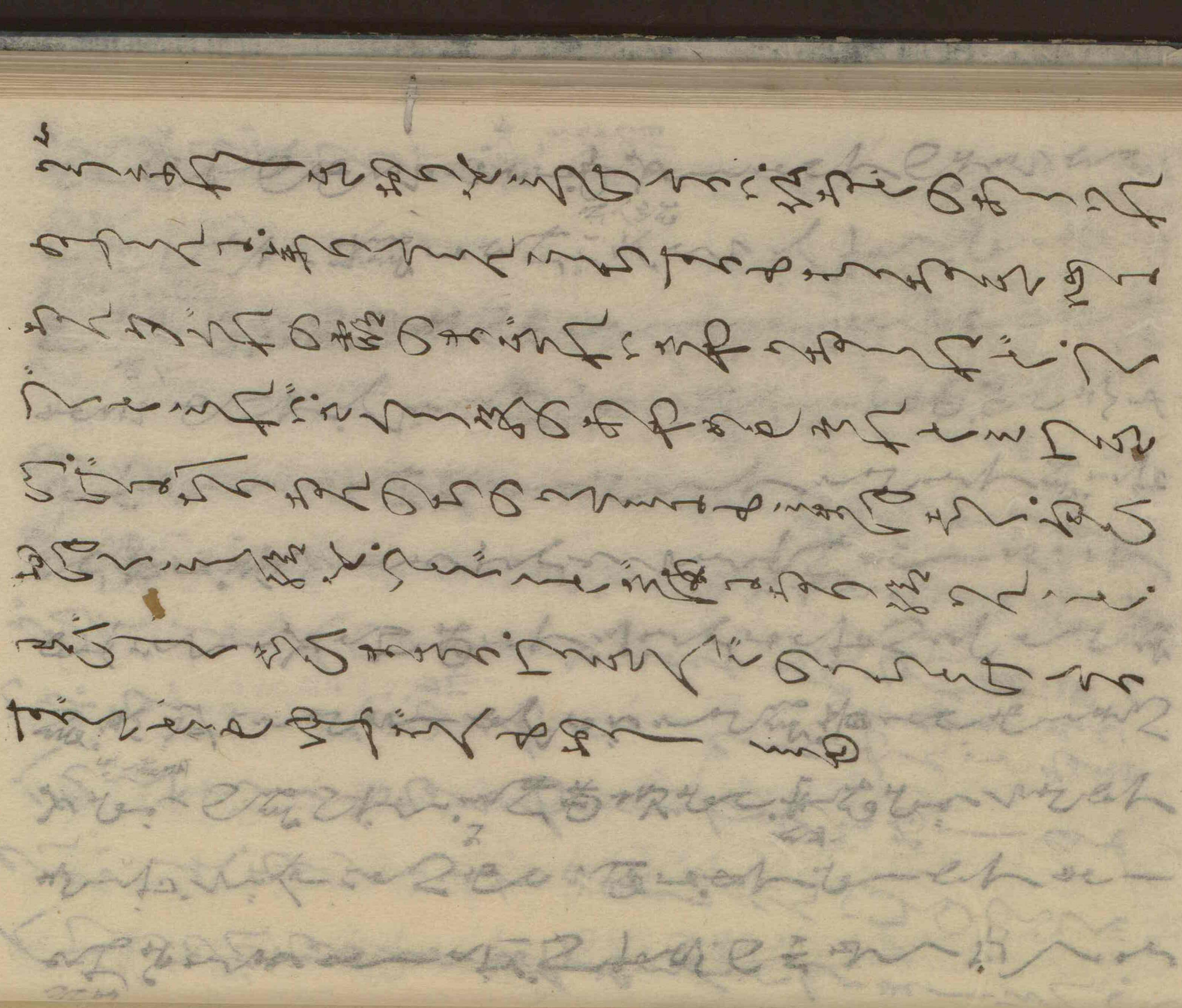
さしむかひ申へる。んざしれぐしのかなまこ分
さ面どもいとこ所あり。侍従（むノ内子）のきこ。そんぞし給とて。
ちうさふらひ給ま。あまぎ（むノ内子 侍従ノ兄之 九近中将 右中弁 二人之）ちさしのぞきぬて。
ぢぐう（詞）のおぼしこよなくなりまかり。れぐれそんぞ
ゆるされまけるをやとて。おとれくしさき海して
つね弁申へば。おまへなるんどとうぬる紙分。
中将（九近 詞）宴仕のいてがしうなり侍る。人（うとくしきとのん）まをとり
よくるハいとほいなきワぐうなとうれへこまへぞ。
弁皮（右中弁 詞）ハまいて（姫宮達へ）ワくしの宴づへをとうぬべき
まくまさのこやハおぼしすてんなど申給。ごうち（姫宮達 地）
きてもぢらひておいさうするいとおかしげなり。

（左近中将詞）内ひろりなどまゐりありきても、右（ひげ黒）のおりしまゐさ
ましかばと、さふなんへくらくことおほくなれど、洞
ぐらてこまり給、女（地）七八（左近中将ノ）の程に抱しなんへ、いとよく
とのひて、（ム）これは（姫宮遊ノ）猶ぜをいりでいましへ（ひげ黒ノ）おぼし
なきてしまゐらへどもがれと、（左近中将ノ）おもひねたまへ、
（姫宮遊ノ）おまへの宮のまぜの中にも、自ひまさりておりしき
きくらをおしきて、ほかのにはまぜこそなどもて
あそび給を、（左近詞）おさなくおもしまして時、これもれは
ひげぞくとあらそひなひしを、右（ひげ黒）なし姫宮の
内宮ぞとさぐめのふ、（玉）うへは（中宮）ひげ黒の内まとさぐめ
給しをいとさはなきのもしるどやすらしぞうへ

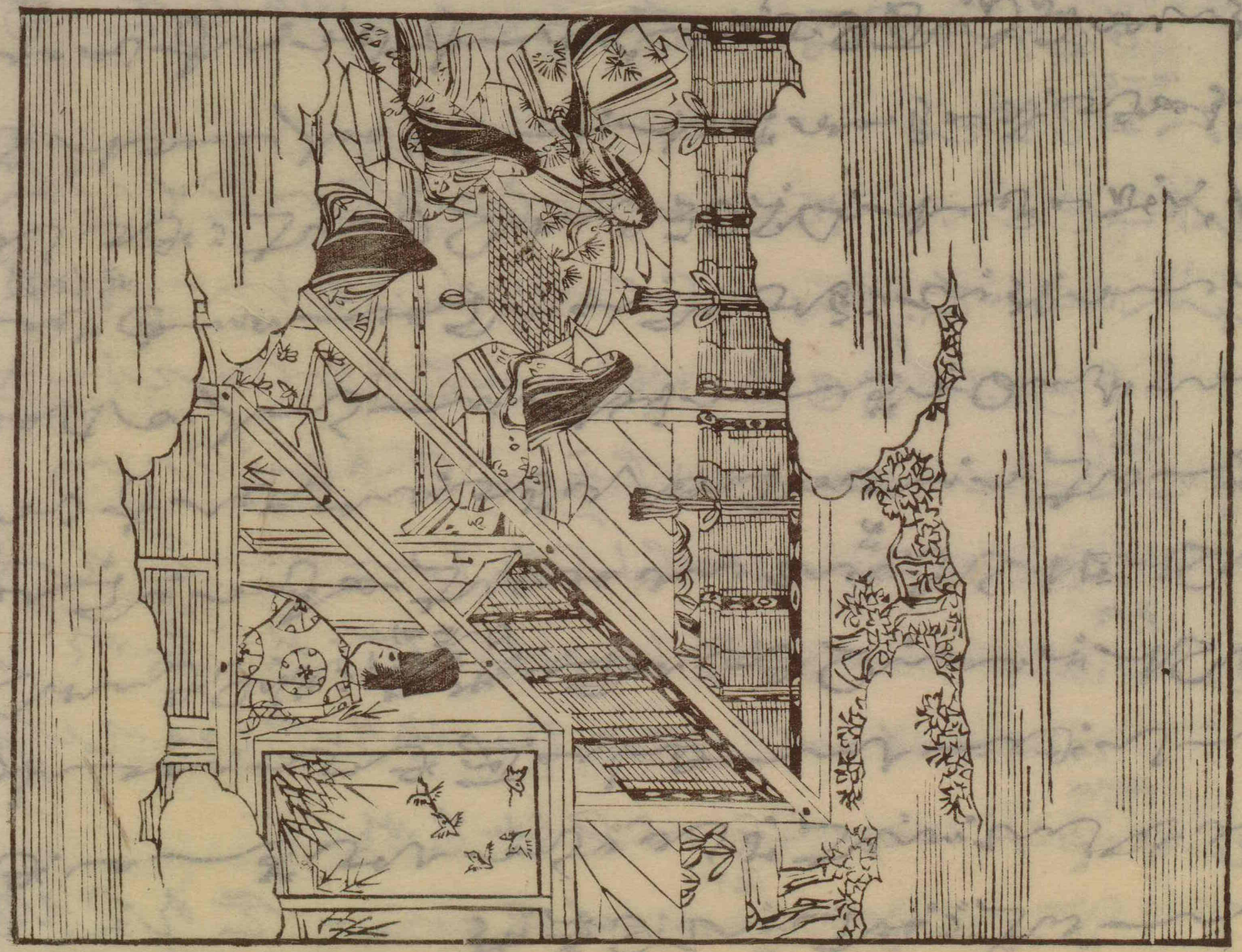
ゆへられしいやとて此様の花手は如はけうは付
ても遊はけうよもひをもひゆへいづれがおまるの人に
せられ給はけう才のうれへもとめがたうことなど
おきさいつしひきさきしかて例(比)よりいのどやうに
おり寸人のむこうはありて今は心もげうまもこえ給
左近中将説のむこともあり
りぬせ茶は心とめてもおし給(ぶ)んの君かくおと
おしさ人のおやは如給此年此程もふよりいいと
けうさうけは私さうのけうちとこえゆへり
次泉院のこうどは御(ぶ)はくは此(ぶ)の程の程ゆしう
昔立しう思し出られらればおまるつけてかいと
おげしめぐりして姫君のけうと紙おながちは

ゆゑ給ふぞありける。院へ（冷 左近中将詞）参り給ひんことは此（玉ノ姫達）志達ぞ
ち給ひもはてたへちまさこちこそすべきれよろげの
こゝけるつけたるをそ世人もゆるすめれげり
いとこなしまはしきれ（冷）ありさ夜は此よるまぐひ
ちるおりしますめれどさりちるぬゆちぞするや
琴笛のしらべ気鳥の名をも書をもどさまたる
がひてこそ人のこゝまもとまるもれちれ其家は
いかばかどやゆへばいさやまじめよりやんごとちまさ（玉ノ姫 嫡女 其家はへ参り給ふ）
へのかたちしもちまさやうまてのこ抱しなふ
めれバこそちまくまてまじらんはむ○いこ
人にしられちることもやあんとつましければ

されおもをましくばりすゑの世もしくせんく
あしずくず今いうひおうご夜よもてあしめてまうし
そおぼしの給いでしが。これ袖衣あり。中将おぼしちのて
後宴道いうちさしめへるでうち給。昔よりおもしそひ
ぬふさくしとうけ袖よて之だんまりずひとつうち給
りん方よ。蒸どよきてんとふきれりしゑさて
ぬふくうあれば。もしちくしてうちもて給へば
まふさあけて人ぞこれいどこねんど哭面おり志よ
例のかね。給従の煮の世ざうしさりりゐ代
うちつれて出給よりれば。大くさ人ずくあす驚よ
らうの戸のあふさくろう。やをしうてのぞきたり。



ぐうこゝれしきおりをこゝろけこゝろは仏などのあらはれ
ゆふこんは来りこゝんこゝちすりもちゝちゝき心は
ちんタぐれの霞のまぎれはさやりあらねどつく
づくとこれはさくら夕のあやめもそれとこゝけき
けげまちりちんのちのりこゝにもこまほちく匂ひ
おほくこゝ絵をいとぐことざ夜まちり絵りんこと
まびしくさひまさりけりきんぐのうちとけこゝろ
すぐことゆふぐんもおりし　三四



此中着かたき

たゞを治めぬ後のらうがはしさもしやなどいやつてまし
いふもあり。なには心をまもりてよしのかはまへにまりて給
まどたゞにて。よばのれおしはかひのそれはありつゝ
ぞうしのたぐるは心ちよげにもてなし〳〵ありつゝま
ごしきの。どおりしとうつて。さしつくへをもせま
ほしくれど。うちとけぬへきおり。さうちなくやかと
思ひて出そめぬ。此まうりまうまぎれもやかうげま
そのぞうびありさげり。惑遊は答のおしそひ
まつおりくしぬかは。風おもりえり吹
さりなつるざれおつりぐいとぐちおりしう。お
うしくれば。まけぐいの非惑

む嬌女

さくらゆへ風まころのさきぐられもひぐ雨
うきさ菜とこうく。れ（嫡女）りこの宰相君
（宰相君）さくとてかけいちりぬる菜ちれがまくらぬ
ゆうさうしとともこぎ。ぎ寄しこすくれば君の姫君
（中宮）りぜまちることいよれつゆ枝ちぐらうけろふ
菜をとぐまし。もこじ。これ（中宮）れりこのこゆふのさこ
（大輔宮）心ありて池の汀まおつるもれあいとちりても
けぐこまよれ。（池）ちぐこのけしまべおりて。ぎちれ
きこまありきてぢりこうをいとおほくひろひて。
もてまいれり
（日ろかべ）おほぞらの風まちれどもさくら菜をれが拘

とぞうさつめてこう。たのあれき（ヨミヌノ如ス）

猶（かれき）栄匂ひあまたにちらさじとおほふぢらりの

袖はありやはうろ（詞）きばげにそこもめれなどいひ

なと寸。（地）くいふに月日もなくすぐせるも。ひ来

うしろめたき紙。（む）んのとれはよろげにおぼせ。（浪）院

よりはれをうそこ日ぐにあり。女（ニコさでん詞みかべし）れうとくしく

おぼしへぐつるまや。うへはうこにきそしうとむるか

めりと。いとまくげにおぼしのゆへに。たちふれるも

くるしうちん。なおじくはこの比のほどにおぼし

たちのちど。いとまめやかにきそしぬふ。（むム）さるべきに

よそはなりすしめ。いとうあやまくうしの給も。かく

じけうしなどおぼしけりはでもうどもぞこう
たゞせさせ給へれば人々のさうぞくなどうられの
ものこゝろもぞいそぎ給。これおほくは荒人の
かねはしめぢうりをひて。世の中のさなきあはれど。
こゝろづきひなて、ひとりいけいらきことう
つけてはのめしこゝちまもせはうくてあしき
やうれまうひはあん。おぼしきうくもあはれどもし
ちうて御供なすさあさせさせ給へなどひと切しげる
こゝてねのかをくうしうもあつれど。うちあげこゝ
みていうあうとくせんのへさゞむべこやうりかな
こ侍従こうちらうあくの給まうすうは。増もひの人

ふれてなん。まめやかなりゆゑなるべし。此ほど紙
覚しきげめて。なぐさめきこえんさまをもこゝなて
なん。よれさえしもなぐらかなんなどや給も。この
此集りすぐして。中此夷をとおぼせ。をするべし。
さしありきていうこそ志たりがかなんまぐらね
なともあさへこるほど紙などおぼすは。おとこも
さしは志かさひうけるべくもあらず。ほのかり見
なりて後はおもかげは意志ういかなんありけと
のこおぼゆるもかうこれこそらず奴ぬりを。さひ
なげき給ことかぎりなし。かひなきことをいはん
とて。前の侍従のぎうしはきこえれば。源侍従のあこ

なぞこゝねゆへりけり。ひきかくしも紙。さちめるもと
こそ。うぢひとりけ。こと（紛注ム）ありがかまやとせて。いたう
もかくさず。そこ（みたす）もうとなくてこゝにも紙しかし
げるかすめたり

つれなくてすぐる月日をうぞ人けしもれうら
めしき筈の去かれ。人（筋人かわん）はかうこそのどやかなり。さ面
よくねたげなめれ。ひがいと人をとられなりこゝろ
いたれをかたへはめるれておあづりそめられり
こゝろとしふもむひいたれバことも地もいたれで。
例かたふ中ね（むノ名ぞう）のおもれ。ざうしのうへより
ゆくも。例のかひあしじうしとなげきがらなり。

仍須の意ハ。これ（基ノ）此也すまんとて。（五）人ハ無りの紙
（能人ノ）こゝろ。いとゝしぐしたゝやすしぶ。けうきこゝろ
ハ。ひとへ。ハ。物ぞ覚しけり。おさまし。さまでうしも
なげゝが。これ（中将のおりとん）まへともあまりこゝろふれまくゝ。いと
おしとしひて。いへもおさくさまで。（能人の和詞）かれ此ごれ（碁）
なんぞ。さしタぐれのこともいひ出て。さぞうり志
事をぐる。又こそしぐれ。衣なるをこれこゝそいき
こゝん。かうこゝもかことも物りすくなうおぼゆれど。
つゝきもあまれといふことゝそ。まことなりかれと。
まめぐちていふ。（中将ノおりとん）衣とていひやるべきなきる
なり。（五ノ中言とあいせんとありしなり）かれなぐさめ給へん此さ由。家げうれしと

ちゆべきかしきもなければ　それなぐれのかん
ぞうなりかんにいとぐかうあやまくなる心もそひ
たるなんとことゆりにしひて　さうし（詞 碁ノ時のぞきしるり）めさ給
たしがいとぐいかまかしかゝぬれうろなりかりと
うしとこそ罪し給かん心ぐるしとこひきてつる心も
うきぬいとうしろめたきれ心なりかりとむかひ出
つれがいでや（義人如何詞）さぞれやいまはかざりの身なれば
もれおそろしくもあらずなりまゝりさてもまけ（碁と）
ぬひしこそいとくおしかるしがおいしかる
めしいれてやもしめぐもせしそまろしましかば
そよなりましもれをなどいひて

いでやなぞなぞなぬまなかぬはひとる
まかじのこころなりかり。中ねうちけしひて
中ねのおりと
ゐりなしやつらさまよしんかちまけをこころ
ひとけまいかぐまかすかどいしかりさへぞつらりけ
あれとてるをゆるせかしいさしまに紙たり
まかすかワガ方となしがなきましひこうしひ
あかす。まるの日は卯月まりまかれがもしかしの
志ぐちのうちまいりさ風よかまいうろし
いりてなぐあねあへれど。女小方はなうぐぐうて
おかす。おとぐも俗のさうしめすどころもあらべし。
なまくれなかれく罪いれんとせひて。かやしう。

ちいめんのけいでまもうちいできてぞ女まし。
えづしあるがちまさましかばさりともえさぶん
えまはざしましなどの給さて（兼人物）れいの
兼（兼人物）とそてちかいしつかふよるやしげき
歎（かけき）の下にまどりんと（比）アれかへり（玉ノ）おまへにそれ
れ。とらうぶろ人ぐ。ひれけさうぐへの。さ海ぐり
いとおしげるりを。さてしてするなりり。中将の
かもと。いさしにをとくいひしさ海のことにのこハ
あらず心ぐるしがるりしなど男ゆれば（玉ム）かんの君も
いとおしと男給。おとゞ（タ）小の（雲力）るのおぼす所なり。
をめて人のれうしこゝあくもと。とりうへ（中志ノ事）ありて

おぼえ。ぼれまつりどきまくげやうよりおかん
りしも。めぐ度しきしとくざりあすさみてもさく人
をはかけておりましき袖す。扇度のかげしきさて
さりしきれぬぞ。虎まつり給いんぐるゆくす身の
きんぐしくしぬれぞ。覚しくおりしも。ぼれ
かくどりつれて衣ぐら。此色し
くさつぞきつもとあずしちの気色まで夢まで心を
さけしかりそ。おれいときしきすれよのこしも
さりおすくあるどいへど。うさぎりてうききくんぞ。
九月なぞ集り給。太のたまれくる度ござんの人ぐ
あまくなりのくり。小方もうしあしくせんさく

ゆへどさしばもさもあしざりしに。ひれことゆへ
しげう男しかりひとまへるを。まるかさこえんも
うたてあれば。かげけ抱ぜ。かさ女のさうぞくあまる
まれゆへり。あや（雲ゐ文詞）しうきけしごろもちきやうなる。
人のありさ夜をこゆへあけかふ程にうけこ夜りり
とじむかこともなりけりをおどろかさせ給ひぬも。
うとくしてなんとぞありけり。おいしかるやう
にてほのめしゆへるほいとおしとこ給。おとぐも
ばふこありこづ（文詞）しも無るべきことしふゆへけりに。
つしむことれ給てなん。それことも。ざうやくに
とてまいすうとうしぼめしけりをゆへとて。

源かね。兵衛佐あまたなれあへり。情ハおかしけりしとく
桃びさうし給ふ。大納言殿よりも。人々の御車なされ
あまたのるハ。こまとくの御むすめ。まうさだらしらの
姫ぎみあれバ。ゆづるまつりても。むけまじうさきそ
くらひのべ侍れど。さしもあらず。とう中納言ハ志ちを。
みづからおりて。中将。弁の君達ずらうとも。まこと
そこらひのふとめく。おりをましうけとどろけバ。
つけてあそばれあり。蔵人の君御例の人々。いとしきさ
ま装をけらして。いまけうぎりとせひ侍る今のぼかす
ぎまうしさ紙。衣とこまとうぶまめこの給
はとだし。されまうけとぞめられて。さけしもあなん

やきんちやでおろせ。もてなりてされバ。姥ざさこかくしは
うちくらしひて。いとゞいたくしまへり。こゝろか
ひろきわざもはおもひのて。中のせざらり備ふる。
こゝしらじ。あざる。いとゞいふをきもれましのひて。
うくきるワくりうまひおもふすかたせ。さまそくさまある
んことに紙切ばまあり。ゑんこゝろことまそてひさ
つくろひなりのへるれさ傳。いと切りし。どもれくれ
ばしの絡しさ傳ちず紙切ばしいで。抛義ある
切りしまてそのふ。切とぐ力のくへのぎづり
うちなしびて。されもしげるれ中まおでうりすゞ
ろごと紙さひいふんとおやえきまも。根とおろせ

まことやとおぼしてやがてこの流れのをさ

遊女
おそれてようつるあしよれひとこともいはぬ

人なくのあれそへゆくしさるとこそあれはのう

さひとりうつとうさきあて詞うりいひやれしと

津の縁
の縁とぞやがてなれころもぜ旅人の詞心くさりあすめげらしさ

候へ夫の名とこたへ
まことおりを悲しとむるさへいとゞあはれぞもとぶ

女詞
あらず立入りぶがなもさくしあすがゞとが海

しくそ

旅人の詞
いけのあれさまは心はまえそれだしるそでや

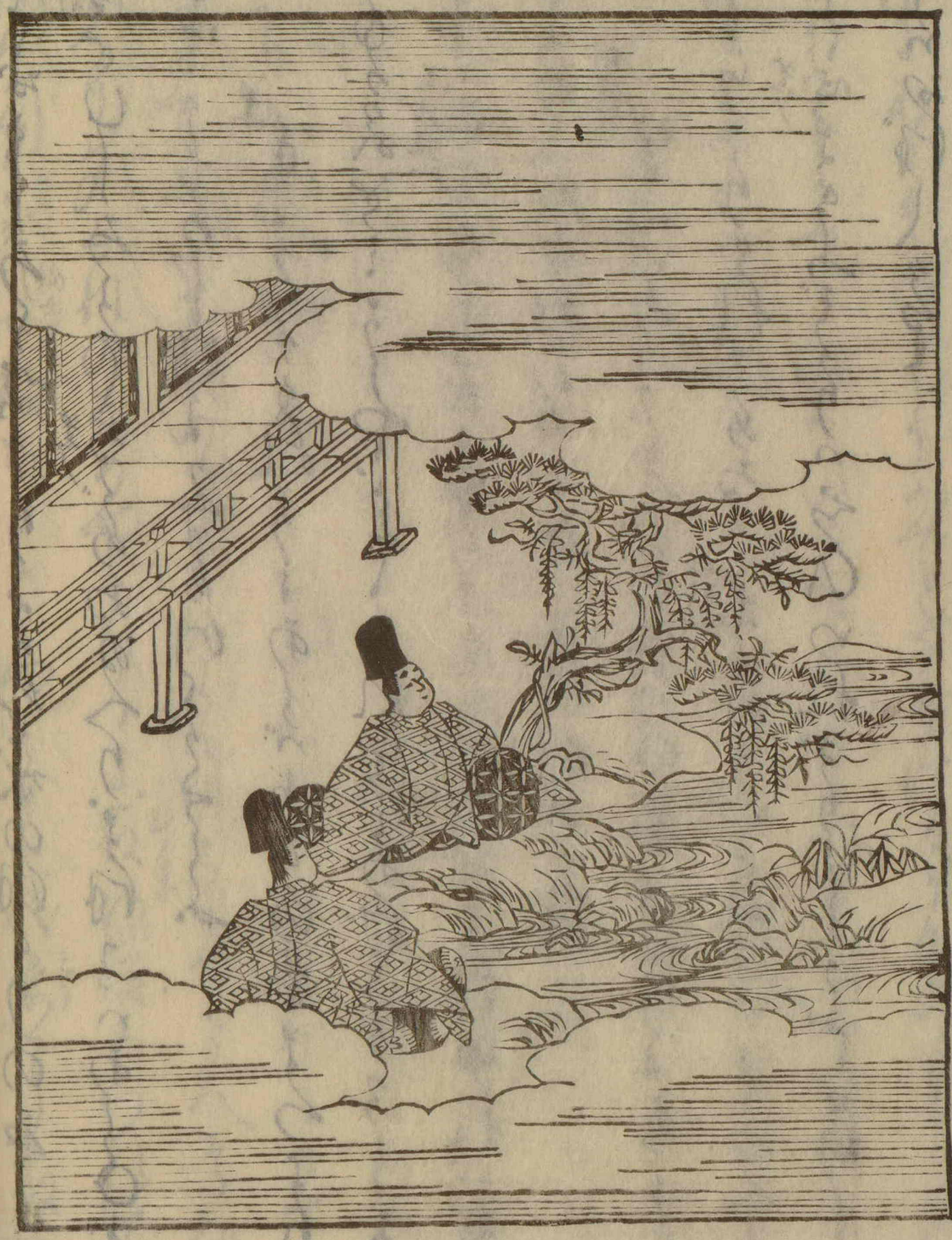
やまん志が一こまつれしうへりもうけあべきれ

むの程でさひとまへましそばひそきちまいそ

がれ侍りましをなどあるまうこそ（嫡女ん）もいへをして
げうれ。うきうへでやりつゝんよと。うるしげり
見して。抱（地）もれこまつぎなりぬ。おとれ（嫡女ノおどう）ワらを。めや
すきうぎりをさくのへられたり。大方の仮式（ざしき）などい
内まいり給はましまうもうことなし。先女（こうきでん）れ志れ
うるまワらりぬて。うん（む）の志いれ抱紙などこそて給。
東ふけてなんうへ（冷）まようのぼりぬひけり。結（きはさ）女れ
などこれとしげへてねびぬへるまいとうつくしげ（嫡女ノ）
まて。さりまこどころあるさ海をこ（冷ノ）まりぬふを。
などてゝをろうなんこちなやうまとさめさぬふ
うこ（冷ノ）人ぞちて。心やすくもてなしぬへるさ海志もぞ。

げるあしまほしうめでこうりけり。かん（丑）のきこゝ氏
しぎしきつゝひぬひなんと。こゝろ（冷ノ）とぐめて見し
けりまいくとくやきしいで（丑ノ）給ふれば。口（冷ノ）おしう
心うしと思しこり。源（蒸）侍従の恵をば。明蓄おまへに
めしまつりつゝげるゝ昔のひかり源氏のおひ
いで給しまおとゝぬ人（蒸）の御おぼしなり。院（冷ノ）のうち
まはいづれの御方まもうとゝかしぎ。なれまじらひ
ありき給。この御（丑ノ）ゝまもこゝろ（蒸ノ）よきありがほまもて
なして。しるゝまはいるゝ給へんのこゝろさへそひ
ぬへり。なぐれのしめやうなりまし。敬（丑ノ字）侍従とつれて
ありくるかれ（蒸ノ）御前ちくこゝやしらく。女楽（えり）なり敬の

いとおもしろく咲かりたる水のほとりの石ゐ
苔(こけ)とむしろにて(芳ノ)ながめおもへりまほにはあらぬど
世中にしめしげにすめけらしふ
(芳)まにくらもれにしあらばふぢの葉まつより
こゆる気をとゝまりやとてもれをあげこゝろしき
などおや(右傍注ハ)志く衣に心ぐるしくもおもほゆれば我
心にあらぬ世れありさ夜にほのめ寸
(右傍注)寸衣のいろはかくへどふぢの葉こゝろにえこそ
かくらざりけれまめなる(右傍注)志にて(ハ)いとおしとしへり
いと心(芳ノ)まさふぢりはしひいれざりしかど口おし
うはおぼしなる



うれ（比）か将（蔵人ノ）のさくさくしもまゐやかまいりを
ましとおやまちもたりべくたげ先んる
なくなんおぼしけ。嫡女へ中の君とうら
ちふまありか（蔵人ノ）ねの君をば母（書ゐ）の所にうらるより。
さ（む）ものやとおもはしてほのめしきこゝ給しを。
こえ（書ゐノ）てをとづれぎてなりまゐり。冷まいかれ君（タノ子達）も。
たゞしくもとよりさふしひまへど。うれ（む ノ嫡女ノ）まいり
かて後おさく来ぞまれく無どの方まさし
のぞきてもおぢさなうまげてなんまゐりいでる。
ちゝ（主ム）はこお（ひげ）とぐの心ざしをさこまへるさ海こと
なりしをかくひさこゝろ（嫡女ノ）此気仕をいかなる

まかとそして中将（左近ノ）をめしてなんの給りをかう。此（行）
かしさ（むへかたへ）ようしかうず。されば（ぞ）そ世人の心のうちも。
かるがきぬべきことなりとか。○てやしこと紙。
おぼし（むゝノ）とかうることまてかうそしこちよしかば。
ともかくも罪しがくて侍よかしかおほをぐと乃
侍（さぶれ）がおまがしこが身のためもなぢきなくなん侍と。
いともおしとさひて。かん（五）の君をまゐふ。いさや（五行）
こゝいまかう俄（コハク）ましもさひこゝぢりしを。あな
がちまいとおしうの給（今ノ）りをしかば。うしろゝなき
まじらひのうち（今上）ワらいたしこなぶなめうを。今ハ
心やすき此（今ノ）ありさ夜なめうまゐせ罪してとさひ

ようしありこれもくびんなしんことにあり
のまくまもいさめこ雨りでいまひきえへし君の
おとゞもひがくしきやうまをもむけての給なれば
くるしうなん是もさるべきまこそいとおろかる
のみて心もさはがい給ひず（た近中将詞）それ昔志れきくせえ
めまこしぬもれなればうう見しの給えすうを
これは頼ことなるさもいかゞはそうしなをすべき
ことなるん中宮（明石ノ）をはゞりきて給とて院の女御（こきでん）
をばいかゞしまり給りんとすううしろうゝやなる
やとかわて見しうはすともさしもえ侍らじ
三字侍らんようおもへば内（今上）は中宮（明石ノ）おりしますとて

と人はまじらひ給ひずや。君まつうまつることは。
それがこころやすきこそ。昔よりけうあることは
しけれ。女は（むノ嫡女今女は之）いさゝかなることはこゞひめありて。
よろしからずさひきそ給ひんは。ひがこゝろやう
りちん。世はきくこゝも給へんなど。二所（中務弁）きて戸
ぬへば（むん）かんの君いとくるしとおぼしぬ。（池）さらはかぎり
なきは（冷ノ）さひのこ月日はそへてまさる。七月より
（今女は）もしこゝ給はかりうちなやゝぬへるさ海げは人志
さ海ぐはきそしまげしかすもことゝりそうし。
いでかゝらんひと紙なれかはそきくきぐ
してはやまんとぞおぼゆる。明（冷ノ）しれはあそびを

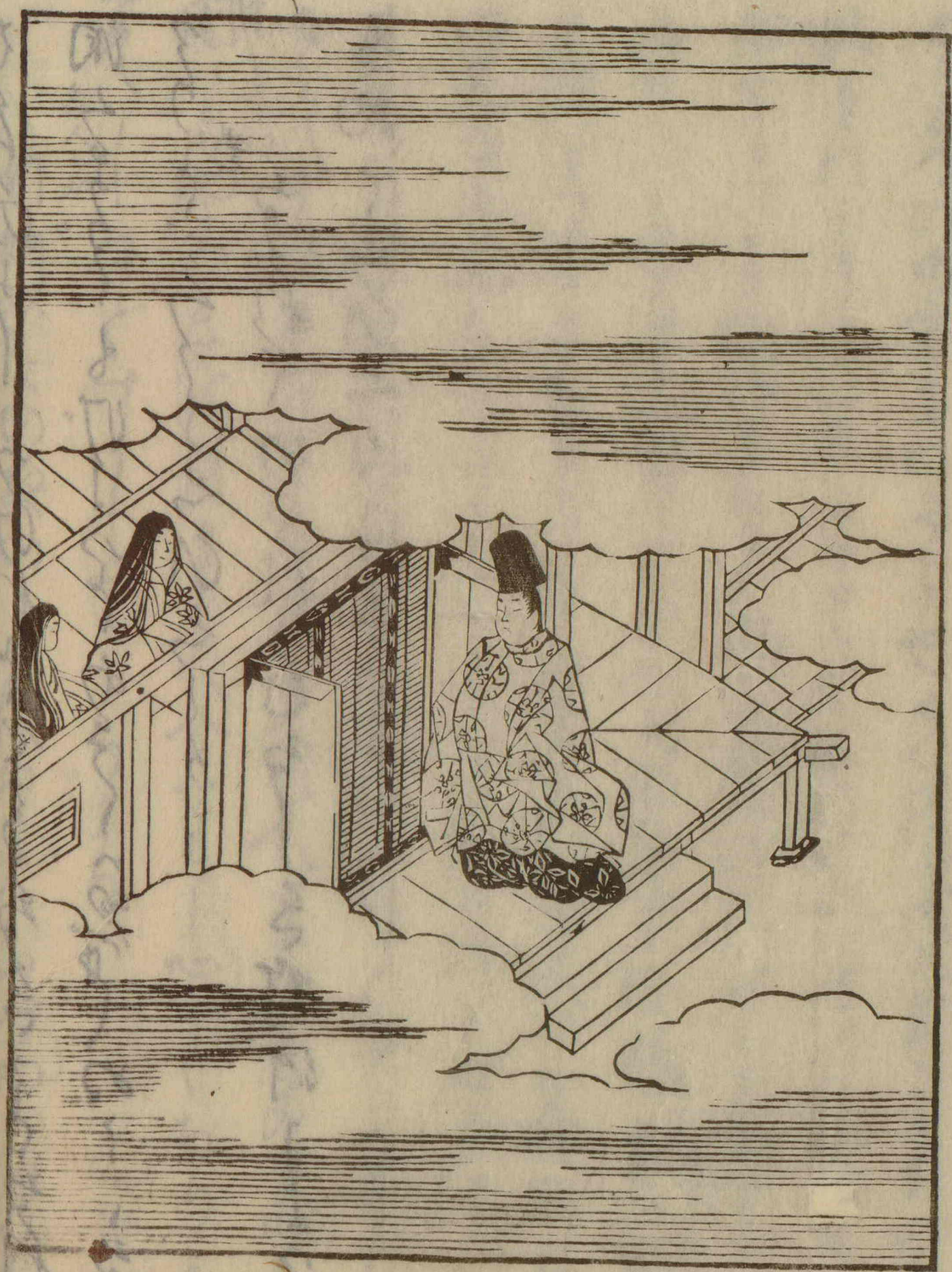
とさせぬひつ。侍従も（芸）けぢかうめしいるれど御
琴の音ちぢに男の絵かれ梅がえにあかをかりし。
中将のおもとれ。和琴もつゐにめしいでゝひかせ
ぬへば男（慧ん）あまたすゝにもこゝにはおぼしざりかり。
そのとしかへりて（地）おとこ（禁中なそ）ごうかをこれかり。女どの
けり人だの中に。地のどもおほかうころはひちまし。
ま中にも。すぐれたるをえらせぬて。此宮絵の侍従（芸）
太の哥（カ）乱（とり）ちり。皮蔵人（タノ内子）のかね。糸（がく）人のかずのうちに
ありかり。十四日の月のもれやうにくもりちかさに。
此前（今上）より出て。冷泉院にまいり。女（こきでん）此ノ嫡女御て此息所と云へ
うへにはつぼもしてゝぬふ。上ぜアえてちひき

つれて来りぬふ。志の大夫のちじの大夫のぞうを
ちなれて。こくらくしうきよげなる人はなき世
なりとこそ。内(今上)のおまへよりもこの院(冷)をばいとたげ
うしうことまさひ罪して。これ人用ざをくちふる
中にも。蔵人のかねいこ(かねんむ)ノ嬌女ノ給ふんかしとさひやまて。
志げ心なし。旬(地)ひもなくこぐらしきつる。蔵もかぎ寸
人がらにつれて。さ夜もこゑもいとおかしくぞ
ありける。竹がうらひて。こちしれもとまふこよる程。
蔵人かねん　正月廿日志ゆくなり
迄まし。夜のまゐれかりしあそびも。さひ出られ
かれば。ひがことも志げべくて。泪ぐこそかり。秋好(地)の夜の
此方にまいれば。上(冷)もそなるにつくしせ。なて此

らんぞ。月は東ゆうなりまくてりひかりも
ましこなりすこのぼりていかるこ給こんとのこ
なばゆれば。ゆむそらもなりこぐらひありきて。さう
づきもさしてひとりをのことぶめらるゝ。面目
なくなん。東一東取ぐまかきありきていとなや
ましうくるしくて。ふしこるに。深傳を院より百
これば。あれくるしおぼしやすむべきまとむつり
なぐら来ぬるり。此前のことぐもなどさりを給ひと
うへうらなしこるへのさ紀ぐすりつぎをえら
れこる程。心こくりかりとてうつくしと思し
こあり。万長年をれくちずさひまし給ひしこやす

むノ嫡女
どころの此方にはこそせぬへれば 蒸ノ 此とも まいり
給。もれこゝまいりたる里べ御ほくてれいよりも蒸
やうにけまひいまめし。蒸 ゆる 殿の戸口にたげし
ねてゝ忌きたりたる人に抱ちなどの給。詞 一夜の月 諸奇ノ夜ノ語
うげいたしたるりしゆぎれ蒸人の小鳥の月
の光にうゝやきたりしかしきもうけしのうげに
そづるにいあらずやきかん雲のとちくていたし
もえしざりきなどくたりぬへば人々長と字もあり。
蒸人今詞
園いあやちなきを月にもえ今すこし心ことなりと
見しなどすしてうちより
蒸人ふ知
行河のその夜のことはおもひいづやしのお

だらりのかしはなけれど、さ（素心）たちなきことなれど、
泪ぐまるくもげにいとあきくはあぎしぬこゝなり
なりとゝぞうしたひたしうり
（素）なぶれてのこれめむなしき竹河によつて
を物とたひたりよき



もれ（葉ノ地）あまれなりけしき後人ぐ知りしかり。さう（葉ノ）へ
知りたちて。人のやうりもまび給へざりし
うど。人ぎ面のさすがる心ぐりしうゑ申りなり。うち（葉詞）
出をまてこともそ侍れ。あなかしことてこそ祈る。
こ（冷ノ）ゑるまとめしいづれば。けし（葉ム）たちまき心ちすれど
まいり給。こ（冷詞）六条院の路（ミヅカ）哥のあしたる。女ぐるまて
あそびきこれけり。いと面白かりきと。右のおとゞ（タ）の
うたれしなまごともかれつりのさしけぎ
なるべき人がたく女にけるよなりや。いと抱のぞ（ず）
なり女さへおほくあつまりていかるちなきことも
おしかりかんなどそしやまて。此（比）ことぞ志んべ

さゝめて、さうへ家にきこえ家、琵琶ハ上手よあへ、和琴となき
ひきなめてあそびわざ、思ふ家のけしきの
ね、ものうべかりけるところありしをいとうく
なしへあいなりめてぞう、いまめしう爪音うくて、
うるさくのまれなるすまひとさうひとわざあまる
ども心得あるぞくれぬるとはまねしわざあれ
人あめりぞかちいとおしくべしと、行こゝろ
とまりつ、やうあまりおほかれど、そのつゝけど
あうしず、かくれ給るあまくおかれくきうちあふれ
根かけ○ども、おりくまつけて、ぞうふ心のくらべけるあげ
しきをみすほるも、いかゞおぼしくれきうつきて

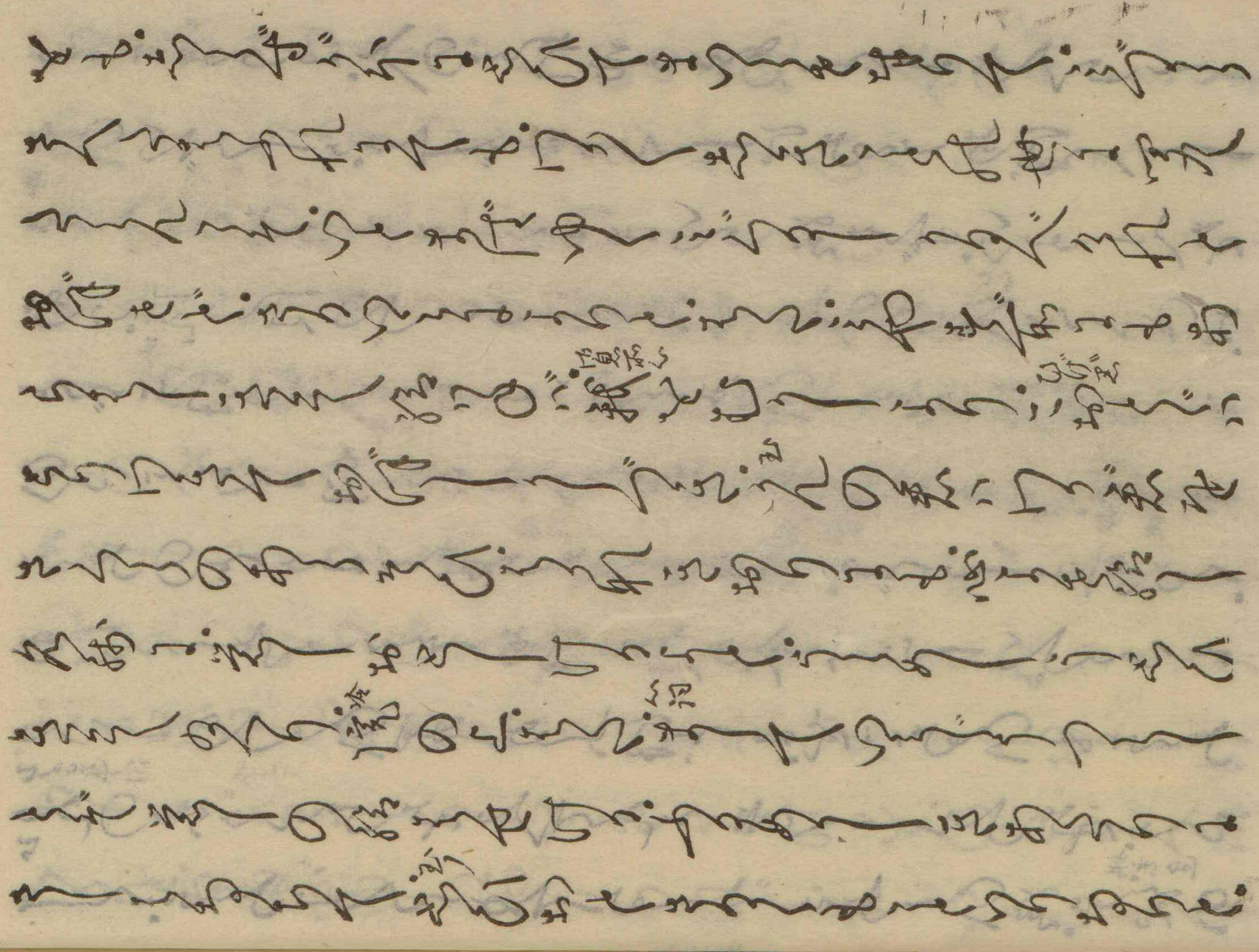
り。卯月に女宮生れ(ひ編女ノ脇 丑ノ重ネ之)なぬことなりけぎやか
なり。抱(脇宮ゆへ)のまへもなきやうなれど。俺(冷)のれかしきな
ちさうひて。右の大(タ)数よりもじめて。れうぶやし
なひ志給。而ぐおほかりかん(丑)の志つといぐきもちて。
うけくしき給に。さう(冷より)まいりなふべきよしのこ
あれば。いかれ(は息不)ほどまいりなぬ。女宮ひとさふ
おとしますに。いとめづしうまけくしうておれ
とれば。いとい(冷ノ)うしうしたりいとぐこぐこ(は息不)なる
なりのこおかし(冷ノ)ます。女れ(こうさでん)がこの人ぐいとうくらで
ありぬべき世なるとこぐなるぎいひおもへり。さう(こうさでん)
しこの(は息不)れ心どもは。ことなかりぐしきくそむき

給ほはあるゆどさふふんぐの中ほくをぐしき
くともいできおどしつゝかれ中(た近ノ)物の君のさいへど
ひとれこのゝゝまてのゝ給しことなるひて(ゐん)ゐん乃
君もむげまかくいひくてのまていなるんひと
けんまたしたちうもやもてなされん(俗)うへのれ
心どんへはあさうゝるゆどさしへてさふしひゆふれ
うるぐよろしうぎせひまちまち給りぐくるし
くもあるべきかれとおもほまる内(今上)はいまことに
もれしとおぼしつゝさびくれ(中宮ノ事)にしきありと
人のつげ字ゆればまづくりしくて御やけざ海
まてうじらうをまんことをきして内侍のゝゝを

(中君ニ)ゆづり聞え給ふ。おほやけ(地)いとかたうし給ふことなりけれど。(内侍ハ大君ノ職之)
としごろかうおぼしおきてしかど。えゆるされざり(玉ノ尚侍ノ儀を)
しを。こおとゞ(ひげくろ)の御心を聞えて(今上ノ)。久しうなり(尚侍ノ)
けり。昔の例などひきいでゝ。そのことかなひぬ。この
(中宮尚侍ニ成給ふ事)君の御すくせにて。としごろ申し給ひしもかた(諸人ノ尚侍ノ望又玉ノ心ざしもとより叶ひたること也)
かりけりと見えし。かうて(玉心)心やすくて内(中宮ノ)ずみもし
給ふべきを。いとほしう少将(蔵人ノ)のことを。母(雲井)北
の方のわざとの給ひしものを。たのめ聞えしやうに
ほのめかし聞え(玉ノ子息)しも。いかに思ひ給ふらんと思し
あつかふ。弁の君(玉詞)して心うるはしきやうにて。おとゞに(今上)
聞え給ふ。うちよりかゝる仰ごとのあれば。さまざま

あるがちなりまじらひのこれこと世のきこえも
いかごとせふのへてなん。まづこひぬりとまそ
のへば。内（今上）の此気色ハおぼしとがむりもことゆゑ
なんうけ給ふ。おほやけごとにつけても。安づん
し給ひぬハさりまじきわざるなんたやおぼし
しけべきるなんと。罪人のへりまたけたびハ中（明石ノ）宮の
此そしきさりてぞ（尚侍ノ）系りのふ。おとゞ（ひげ黒）おりせまし
かバ。そしけち給ハざしましなど。おもれなりす
ども紙なん。おほ君ハうちなど。名こうおしげ
なりと。（今上ノ）きこしめしをさらけりを。ひきこゞへ給
へるを。なほ心ゆるぬやうなれど。是もいとらうく

しく。こゝろまくらもてなしてさふらひ給。さ紀の
（玉）
りんの志かたちをかへてんと覚しころを（姫宮達）かる
（玉ノ手達ノ詞）
ぐるまあつかひ罪ゆふほどまをこなひもこゝろ
あはしくしうこそおぼされめ。今すこしいづるも
こゝろのどかまこまりなしなて。もどうしき事なく。
ひさこちまいとめのへと思ぐちの戸のへバ覚（玉地）し
とぐこほりて。（今上）うちまハ時ぐ悪びて乗り給ありも
あり。（冷）院まはいづくりしき内心ぢへのる紙こゝろ。
さるべきありもさしまいり給ちず。（玉心）いましへを
（冷）ひいでしが。さすぐまかくじけるうおぼし
うしこまりま。人のこれゆりさぬことまさへりし



うちうちひめておもれはのこ覚しまさりとし
ごろありて又男みこうこ給つそこうさふひめふ
此うちぐはかうことなくてとしごろはなりは
けりとなろうなるぎりかりけすくもなど世人など
ろくこうどまして（冷ム）かぎりなうめづらしと此今文
とばしひきそしめくりおりね給ちぬよなるまし
ばいうまうひあらまし今はなほこともちんなき
よ紙いと口おしとなん覚しけり女一文を恨
なきもれはしひ罪し給しをくさ風ぐうつ
くしうてかずそひめへればめづらなりうるまそて
いとことはなばひうるをなん女此（こさでんな）もあまりうう

まで〻ハ抱しかゝんとれうろうごきけり。地ことは
あれてやまとかゝぐらねぐしさこといでさか
としてそれづゝれ中もへぐゝ家べかあり世のこと
としてかぐなるぬ人のなりしひまも。もとよりこと
もりえゝかゝるこそ。おいなき世はよそのへも。
こゝろをよすりけぎなめれば。冷院のうちの上下の人ぞ。
いとやんごとなくて。ひさしく（こさでんを云へ）ぬへるれかゝる
のことゝりて。もうなきことも。此れ方（法息所）ざまう紙。
よりぐぐとりなしなどすりを。れをうと（左近年）れ君遊も。
（河）されどよあまうやハ男をきけりといとゞ給心（ゑん）
やすゝぐ男ぐりしきまくよりくらてのどやうる

めやすくて、よ紙すぐれ人もおほかりし。恨
なきさいたいなくて、家づゝのすぢハ、ちひより
まじきつぎなりけりと、おほうへハなげき給。男（玉ノ嫁女ニ地）し
人々のめやすくなりのぼりつゝさてもおハせまし
（宮位）
ようともなるぬぞあまたあるやその中に源（基）侍従
とて、いとつうひもぐなりとゝしハ、寧和の中ね
まて、まれふやかほうやと男まくくめでさハがう
なるげにいと人がら紙もりかる心まくまた紙やん
ごとなきこゝろち、大臣（誰ともかし）のれむすめを心ざしありて
のぬふなりなども、男（基ノ）いれずなどあるにつけてその
うえハつう心もとなきやうなりしかどめやすく

ねびまさりぬべかありなどいひおハさうす。かね（蔵人ノ）
なりしも。三位の中ねとかいひて。覚しありかたち
さへあらまほしかりきやなどなまごろワろさ
つゝうまろりべハうち志のびつゝうなさげなるなれ
ありさ庵よりハなどいふもありていとおしうぞ
えしし。此中ねハ（タノ子息 蔵人かねこ）れせひそめてし心殺（えて）ぞうくも
つゝくもせひて。左大臣（誰ともなし）のれむすめをえたれど。
おきく心もとめず。風のまてなりひたちをびのと。
手なるひまもことくさまもすりハいかまさふやうの
ありいかなるかん。家まで（玉ノ嫡女ん）あやすげなるさよれむろし
さま。星がちに成なひまかりかん（玉ん）のたさひしやう

まほあふれあり道をも口おしとおぼしけれども内の
君ハ中宮にまゐらせ給ふころやみけまへてあらし
てみこも数あり心よくさきかえてましくひ給ひ
大臣うせ給て大ハ右よ蔵人大納言右大将なりけるかたう
太政大臣よなり給つぎくの人ぐありあがりて
このたびの中将ハ中納言よ三位の君も宰相
なりて悦しのたびの人ぐよろしければしもよりまゐる人
なきかほのまちありけり中納言のけはひなどこうび
まざとみ内侍のかんの君をまゐりたまへり蔵人の座
また拝しまゐり給ふ君のまへめしてすく
いと美しくぬゆくむぐらのかどせよさ給もぬ

仇心だんまも。先昔の仇とせひ出されてなんなど罪を給。仇こし忍のあてまあいぎやうつ給。そう後ほしういまめきたりふ（蓋ん）りがたくもおりすうかれ。うれば院（冷）のうへはうしゝおふ仇心こえぬぞうし。いまつゐまことひきいでおひてんとせふ。（蓋詞）よろこびなどは心まはいとしもせふまへれども。まづ仇ちんぞられましてまいりけれ。よぎぬなどの給はすうはどろうなつゝまうちうへさせ給まやと申給。（玉詞）ふはさぞすぎまたる分のうれへなど。きこゆべきつゐでまもあらずとつゝ給れど。けぎと立よりて後りんことはかゝる後。さのめんなくてもる。

さすがにくだくしきことにあるん。冷 院にさふらは
なくにいとうう世中をしひえぐれ。中宮ちう
やうにこぐらふを。女はなれこさうし。又 枯好 船の家の
はかくまもさりとも。覚しゆうされちんとしぬへ
すぐすに。いづくにもちあげに。ゆうさぬものに
おぼされしあれば。いとうたしいてくて。宮たちは 法皇和ノ後ノ
さてさふらひ給。このいとまじらひまくげちな。
えづうはうて 慧和ノ事 心やすくごにちぶめすぐひぬへ
とて。まうで させうをそれにつけても罪にて
なん。冷 うへにもうしぐ。覚しの給りすちう
つねでありがほのめしそうしぬへどき海うう

ざ海まこれもしくしかひていぞしそ侍し程に
いづるをも心やすくうちとけしのこゝろしし
かど今はかゝることあやまりにおさなうおほけ
なりけるこゝげかゝの心をもどかしくなんとうち
なげいのふ気色なりさしまうまでおぼせまじ
きことになんかゝれまじらひのやすゝぬことに
昔よりさることなり侍はけるを位をさりてしづ
かにおりしましなまごともけぎやうなるぬれあり
さ海となりにくるにこれもうちとけのへるやう
なれどをのくうちくにはいかゞいどましくも
おぼせことともなるゝん人はなまのとがとゝねことも

我此男にとりてはうしめしくなんおいなきことを
心をうごかし給ふと女此結のつゆのはらせなる
べしさばかりのまぎれもわしじもれとてやハ
笑しうちうんうぐおぐうぐうまもてなして此うん
じすぐすべきことを仍なりをれこの方にそそう
すべきことをも仍らぬことをなんといとすくく
ふうゆへばこひめんのついでにうれへ笑んと
まちつけなりうらひもなくおほのはことなり
やとうちひしておりすう人のおやまてもうぐ
しがりぬへる程よりハいとワやかりおほど
いうこうちすこやまぐ有もかやうにぞおもすべう

めう。宇治の娘（源ノ中八宮ノ姫宮之）君の心とまりておぼゆるもかうざ海
なるけるひのおしさぞうしと。さひねぬ人里。
内侍（むノ中娘）のうへも。これごろまでのへりこゝろくるる
すゝぬへるけるひおしく。大かたのどやかなまゝざ
なくことなき御事精どもれ。すのうち心もづしう
おぼゆれば。こゝろづかひをられて。いとゞもてしげめ
めやすき氏。おぼ（むふ）うへは。ちかうもこましかばと。うち
おぼしなり。大臣（紅梅地）殿は。こゝに。殿（む）のひんがしなりなり。
ぶひきやうの恩がれさんざちなど。なまくつどひ給。
兵（白）なる宮。左の（夕）おぼいとのゝ。のりゆゝのへらうち。
すまひのあるじなどなれ。（白ノ）おりしまゝをさひ（紅梅ノ）

てゝふのひかりとさうじなり給けれどおりし（白ハ）
まさず心にくくもてかしづきなふ姫君達をさうは
心ざしことまいかでかとさひ罪なかべかめれど
（白）実ぞいかなるまかあらん此心もとめ給はざりける
（薫）源中納言のいとゞあらまほしうねびとくのひなま
ごともをくれたるかたちなく抽しなふ後おとゞも（取物）
（桂柱）小方もめとゞめなひかりとちりのくのしりて
けちゞふ車のをとゝさはなきふこゑぐも（むノ）昔のこと
さひ出られて これとれ（むノ）これはもれあはれまなぶめ給
（蛍）こ（玉祠）実うをなて 程もなくこれ（取物）おとゞのうらひ給し（桂柱へ）
ことゝいとあもけけいやうに世人はもどくなりし

ども、らひもさしずかくてまれし給も、さらすずさるか

くるまめやすりかり、さてめる代世や、いづれかりう

まへさるどののふ、たの(夕)大饗の宴ね中ね(殿人おおるす)大饗合たん(ざいさやう)

又の日、ゆふつけてうるま(むへこ)まいりかへり、こや(むノ嫡女)まて宴里

まお(なほ)はすかとせかて(宴ね中ねん)、いとゞ心げさしそひて(討)場はやけ

のかずまへ給よろこびなど、何も思て得ず、まる

かしのせきとしくるまぬ殺(をば)まこのこゝろし月より

そへて、さるかへもうかんかくてなきこと、润そし

のごともくしさしめつかり、女(とせ)七八の日どれいと

きりま白ひ、まるやかすかくちくしきまへり。

(むね)こぐるしの意ごちの世中、せうろのまくはせごう

巳四十二終

てづきくるねをばなまれ出ぬ。ゑ(ぎ)しいますがしふ
や。右衛(ひけづ)、おりをましりバ。こゝろ人(むノ子を)ごもかゝ事すき
ひごとにぞ心いそぐしましとうちなげきなふ
右兵(左近中将ノ子)清種。右大(右中弁ノ子)弁にて。これ兆(いさん)参(ぎ)候なるをうれい
しとせんり。仍候ときゝもめりしぞ。此此以中ね
ときゝも事。としよりもひの程いかゝ且なしねど。
人にを(宮位を)くらとなげき(むノ)なんり。寧(ムタノ子息宮位ノすこゝろを云へ)おもとくつき
づきしく

69038
6AP78